

保存の  
はなしをしよう。

24 生きものたちの冬

羽の生えたムシの匂は、春から夏だと思っていました。しかし、一年を通して、「トラップ」にはかかります。「トラップ」は粘着剤が塗られている小さな函で、そこを通ろうとするムシがくっついてうごけなくなるものです。どのような種類のムシがどれくらい生きていくかを調べています。一年を通して、そこにかかったムシの観察をしていると、季節感がだんだん新たになっていきます。

「小バエという名のハエはいない」といいます。トラップには、タマバエ、ノミバエ、キノコバエのほかにも、初夏に蚊柱を作って群舞するユスリカが冬でもかかることに驚かされます。いったい、どこにいるのか。寒くなっても木の葉だまりや草むらをよく観察していると、ぶんぶん飛んでいます。面白いことに、栄養状態が悪いと別な種類のように小さくなり、良いと大きくなります。大きい個体が捕まるようになったら、どこかに餌が豊かにあるというしるしなので、それを探さなければなりません。

それにしても、和歌山は暖かいといっても、ムシたちにとって冬の寒さ

は厳しいはずですが。ムシによっては暖房のある室内へ避難してきます。近年では、ふとその文字を目にしてしまった人を不愉快にさせるために、「黒いやつ」「G」と表現しなければならないという、クロゴキブリなども外から入ってきます。大きな蛾や、その幼虫のイモムシの匂も暖かい時期だと思っていました。それが、成虫はもちろん、大人の指くらいの大きさまでよく育った幼虫なら、さなぎではなく、幼虫のまま越冬できるのです。これも、知らなかったことです。

先日、休館日に、薬剤で殺虫処置をしました。すると、トラップに内から外へ逃げようとするムシたちがかかります。今年は数が少なかったのですが、目当てのムシがかかりました。文字がだめなら、写真をもっとだめでしょう。今回も写真はなしです。生きものたちの冬をさらに厳しくしてしまっただけ心苦しいのですが、美術館はムシの避難場所にはなれません。

ところで、見たくないものを見ないと決めてしまい、ほかの人にも見せないように要求するのは、ほんとうにそれでいいのかなと不安に思います。駆除する対象をきちんと観察することで、必要な手の打ち方がわかるからです。たとえば、集合住宅で燻蒸を繰り返し、ムシがとなりへ逃げていって、すぐに戻ってくるというときには、掃除という人体にも環境にも害の少ない方法を選ぶこともできるのです。

(植野比佐見)

MUSEUM CALENDAR

開館/9時30分-17時00分(入場は16時30分まで)  
休館/毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

2023.2.4(土)-4.9(日)

とびたつとき  
池田満寿夫とデモクラートの作家  
広島市現代美術館が所蔵する池田満寿夫の版画コレクションを中心に、池田が影響を受けた「デモクラート美術家協会」の作家たちの作品を合わせ、戦後、世界的に高い評価を獲得した日本の版画の展開をご覧いただけます。

2023.2.11(土)-5.7(日)

コレクション展2023-春  
特集:新収蔵 奈良原一高の写真  
特集展示では、近年まとまって寄贈を受けた奈良原一高の写真と、和歌山市の女子刑務所が取材地のひとつである〈王国〉のシリーズを中心に、同じ1950年代の重要なシリーズである〈無国籍地〉〈人間の土地〉と合わせてご紹介します。



池田満寿夫  
《海のスカート》  
1965年  
広島市現代美術館蔵



奈良原一高《壁の中〈王国〉より》  
1956-1958年 当館蔵  
©Narahara Ikko Archives

友の会より: プレゼント版画は若木くるみさん



未完



赤蜜柑



みかんジュウ図

会員特典である版画の制作を、新たに若木くるみさんにお願ひしました。版画は3種類。いずれも北斎の浮世絵のイメージに、みかんを取り入れて翻案した、なんともかわいい作品です。版画の配布ははじまっているので、お受け取りをお待ちしています。ミュージアムショップにお越しください。

メールマガジン Facebook Twitter  
ご案内

メールマガジンでは展示会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトより登録いただけます。また Facebook や Twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展示会の無料観覧
2. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展示会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引



入会のご案内

一般会員 6,000円  
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。

詳しくは友の会事務局まで。  
Tel. 073-436-8690 担当: 中川

MOMA Wakayama

news

2023 n°114



ジウヤ・ソーヤ・マーシェ《村の結婚式》1994年 ミティラー美術館蔵  
「ミティラー美術館コレクション展」より





## 和歌山県とインド・マハラシュトラ州との友好交流による ミティラー美術館コレクション展 インド・コスモロジーアートの世界

2022年10月8日(土) - 12月25日(日)

### ミティラー美術館コレクション展 in 和歌山

和歌山県とインドのマハラシュトラ州は、2013(平成25)年に覚書を締結し友好関係にあります。今回、2022(令和4)年の日印国交樹立70周年および2023(令和5)年に覚書の締結10周年を迎えるのを記念して、和歌山県と和歌山県立近代美術館の主催により、ミティラー美術館コレクション展を開催しました。ミティラー美術館は、新潟県十日町市の山中にある私設の美術館です。同館は、長谷川時夫館長により1982(昭和57)年に「ミティラー美術館」として開館し、活動を続けています。自然豊かな環境のなかでインドの美術を公開する同館は、日本の美術館の中でも知る人ぞ知る特異な存在と言ってもよいでしょう。同館は、ミティラー地方で3000年にわたって母から娘へと伝承されてきた壁画「ミティラー画」、マハラシュトラ州の先住民族のひとつであるワルリー族が描く「ワルリー画」、マディア・プラデーシュ州近郊のゴンド族に伝わる「ゴンド画」のほか、インパール地方で盛んに制作されたテラコッタなど、多数の作品が収蔵されています。加えて、インドからアーティストを招聘して日本での滞在制作の支援も積極的に行っており、同館のコレクションを代表する作品の多くはこの国際交流の中から生み出されました。

本展覧会では、同館のコレクションから18作家45点の作品を紹介。今回は大型作品が大半を占め、一辺4m近い大作も展示室に運び込まれました。インドのフォークアートは素朴ながらも力強さに満ちており、現地の人々が長い年月の中で培ってきた宇宙観がうかがわれるものでした。さらに、在大阪・神戸インド総領事館の協力に関連事業もバラエティ豊かなものとなり、各種トークや講演会のほか、現地の人々を招いてのインド舞踊やインド伝統工芸士5名による実演等も実施することができました。インドと日本の交流の中で生まれた芸術に、来場者の多くが新鮮な眼差しを向けておられ、和歌山へやって来たミティラー美術館の作品たちは、人々に活力を与えてくれたように感じています。

(藤本真名美)



オディッシー舞踊団「スミタレ」によるダンス



インド伝統工芸士たちによる実演

### 長谷川時夫トーク & ライブ「タージ・マハル旅行団からミティラー美術館へ」

ミティラー美術館館長の長谷川時夫氏は、1969(昭和44)年に結成された音楽集団、タージ・マハル旅行団のメンバーとしても知られています。長谷川氏は、1971(昭和46)年からタージ・マハル旅行団としてヨーロッパ・ツアーを行い、翌年に帰国して以降、新潟県十日町市大池に住み、1982(昭和52)年にミティラー美術館を創設。以来、インドから多数のアーティストを招聘しつつ、雪深い新潟の大地に根ざした独自の自然観、宇宙観を深化させてきました。

展覧会開催にあたっては、長谷川氏の芸術活動の原点である音楽やパフォーマンスにも焦点を当て、そこからミティラー美術館での活動へと至る歩みを辿り、さらに長谷川氏が現在表現する世界を体感する機会も設けたいと考えました。長谷川氏が2021(令和3)年に、ファーストソロアルバム「Stone Music」(Experimental Rooms、10月15日)をリリースしたこと、川崎弘二氏が『ストーン・ミュージック 長谷川時夫の音楽』(engine books-difference、11月5日)を刊行したタイミングであったことも今回のイベント開催の後押しとなりました。

11月5日(土)の15時30分から18時30分にかけて2階ホールで開催したイベントは、川崎氏によるトークと、長谷川氏がさまざまな世代、バックグラウンドを持つ演者とともに即興演奏を行うライブの2部により構成しました。川崎氏のトークは、ニュージャズから、小杉武久を中心に結成されたタージ・マハル旅行団、パフォーマンスなど長谷川氏の歩みを綿密な調査に基づいて辿るもので、これらの活動とミティラー美術館とが地続きであることを実感するものでした。ライブは、「re\_location」を主宰する山雄起氏の協力により集まったメンバーとともに結成されたStone Music(長谷川時夫、金子ユキ、堺啓介、むんな、Endurance、Tatsuro Murakami、TOMC、大野馨、櫻井秀武、西村仁美、藤原るか)の即興演奏に、石や竹、影を用いる長谷川氏が実践してきたパフォーマンスや、前谷康太郎氏によるミティラー美術館周辺で撮影された映像を再構築したビデオも加わりました。今後の展開にも期待が高まります。いずれイベントの映像記録などの公開も検討していきたいと考えています。

(奥村一郎)



川崎弘二氏トーク



Stone Music ライブ





上空より眺めたミティラー美術館



ミティラー美術館展示室

## ミティラー美術館コレクション展によせて

長谷川時夫（ミティラー美術館館長）

インドは昨年、世界人口1位となり、GDPも第5位となりました。やがて第2位、3位の経済大国が、アジアから出現するのもそう遠くなさそうです。もしそうなれば、文化の価値観や基準も変わらざるを得なくなるでしょう。そのようななかでインドの代表的なフォークアートを有する日本のミティラー美術館の存在は、世界の人々にどの様に映るのでしょうか。開館以来40年にわたりインドのアーティストによって創造された作品が、雪深い森の中の小さな美術館に存在するという稀有な出来事。そのことを日本や世界の多くの人々が関心を持つようになる時代が来るのかと楽しみです。

今回の和歌山での展覧会は、このミティラー美術館の国際文化活動の成果の一部が公開されたものでした。このような機会を与えてくださった大阪・神戸インド総領事館、和歌山県、和歌山県立近代美術館の方々に感謝の気持ちを伝えたいと思います。

今回展示された作品のほとんどは、インドで生まれた絵画をコレクションしたのではなく、インドのフォークアートの描き手たちが何千キロも離れた日本にやってきて、ミティラー美術館の活動に参画しながら、当館や日本全国各地での公開制作を行ったことで生まれたものでした。このような奇跡がどうして起きたのでしょうか？

本展会期中に開催したイベントでも、川崎弘二さんが詳細にご紹介くださいましたタージ・マハル旅行団での活動に話は遡ります。1969（昭和44）年に結成されたこの前衛音楽家7人によるグループのひとりとして私は活動し、そして、世界各地を歴遊する中で、特にインドの文化や風土に強く惹かれていきました。

1972（昭和47）年、ヨーロッパ公演の後に帰国した私は、コスモロジー、宇宙観を深めるため世界でも有数の豪雪地、新潟県十日町市の森に東京から移住し、そこを「宇宙の森」と呼んで暮らし始めました。しかし、地方の過疎地で、私は現地で音楽仲間も出来ず、さまざまな地方の問題に直面します。東京は欧米の後追い、地方は大都会を追いかける。欧米で活躍する人が評価され、大都市で活躍する人が地方に呼ばれるパターン。いつまで経っても日本の独自の文化が生まれません。欧米による植民地時代が終わり50年、100年と経っても変わらない流れに疑問を持ちました。日本はインドとは異なり植民地とはなりませんでしたが、近代化、現代化の中で文化植民地となっていると感じています。

前衛音楽家としての私の活動は、竹や石を用いたパフォーマンスとともに、声明、浄瑠璃、都々逸、古民謡、アジア、中東の声楽など日本文化やインド、中東の音楽をベースとした新しい即興ポータルを模索するものです。しかし、都会から離れれば離れるほど、私の音楽への理解者と出逢うのは難しくなりました。しかし、70年代はヒッピーをはじめ、世界の若者に社会への危機意識や自然回帰の動きがあり、実験的なフリースクールを始める事になりました。子どもたちとともに、雪屋根の上の月見や、自然とのコミュニケーションを深める禅問答をするなどして、活動を続けてきました。

明治開国前の優れた日本から世界に発信する宇宙観を持つ文化を模索するために、前衛芸術家が活動しやすいニューヨークではなく、日本の文化が深く伝承されている雪深い山間地に住んだ私が、インドの村落や部族文化を背景に持つアーティストや彼らの絵画と出会うのは、森に入って10年ぐらいたった後のことでした。その頃、居住地の大池で大規模な開発プランが持ち上がりましたが、私はそれに反対し、最終的には十日町市の協力で、代替案として1981（昭和56）年に元大池小学校を使用した「大池市民施設」（のちのミティラー美術館）を設置することが決まりました。

同施設ではさまざまな催しを開催しましたが、1981（昭和56）年に日本人の青年が、インドから持ち帰ったミティラー画を日本で紹介したいので協力して欲しいと訪ねてきたのをきっかけに、その展覧会を開催しました。ポスターのイメージに選んだガンガー・デーヴィーによる一枚は、特にコスモロジーが強く感じられる不思議な絵画で、私は題として《上弦の月を喰べる獅子》（図1）と名付けました\*。

私はガンガーさんに会いにインドを訪れました。そこで「描き手はみな貧しい女性たちなので、助けてほしい」とガンガーさんに言われたのもあって、大池の施設の使い道を模索していた私は、ミティラー美術館の創設を思い立ちました。現地を視察していて、日本の浮世絵と同様に、ミティラー画が近代化と共に散逸するのを危惧し、それらを一堂に集めて紹介できれば、小さな美術館でもいつか世界に役立つのではと考えたのでした。そして、大池市民施設は1982（昭和57）年にミティラー美術館としてオープンしました。オープンの年には、手工芸局長とともにガンガーさんを招待して、ミティラー美術館の正面にある小学校時代からの白く塗られた壁面に描いていただきました。

その後、音楽の活動もあって私はインドを何度も訪れ、現地での作品

収集を開始しました。それから約5年の間に蓄積されたミティラー画等に対して、当時インディラ・ガンジー首相の文化遺産顧問を務めたプブル・ジャヤカルさんにお目にかかった際には、彼女から「世界に類を見ない質と量のコレクション」であると評価していただきました。ジャヤカルさんは、インディラ・ガンジー首相と世界にインド文化を紹介するため世界で初めて「インド祭」を開催しようと計画されていましたが、この催事はヨーロッパ諸国、ソ連、アメリカを回って1988（昭和63）年に日本にやってくることになりました。インド祭が太平洋側の大都市だけで計画されていることを知って、事務局長の松本洋さんに地方での開催も申し入れたところ、事務局長補佐を務めることとなりました。「国家催事は全国民のものであるべき」と考えた私は、協力金と私財を投じて、新潟市はもちろん、北は網走から南は与那国島にまで及ぶ「ミニインド祭」を実現させました。これをきっかけに「ポストインド祭を考える会」をスタートさせ、やがてミティラー美術館の全国展開に発展していったのでした。'88インド祭でのミティラー絵画展の会場となった「たばこと塩の博物館」は今日まで6回の展覧会を継続して開催し協力してくれました。こうして、日本国内での支援と参加したインドの勇気あるアーティスト達の協力や交流によって、日本でインドのフォークアートが発展していきました。

この頃からインドのアーティストによる長期にわたる滞在制作（ふたりずつが3ヶ月から半年間）がはじまりました。大型トラックの運転やアーティストの世話はスタッフや私が自らい、4トントラック（パネルバン）の中古車も購入しました。文化ビザでの来日に対して薄謝程度の支援ですが、作品を将来に残そうとする気概が伝わっていったようで、多くのアーティストがミティラー美術館での制作を申し出るようになりました。過去に展覧会を開催した自治体からも好評で、再度オファーが来るようになり、他のフォークアートはないのかということで、ワルリーの人々や、ゴンド画のジャンガル・シン、インパールのニラマニ・デーヴィーとその娘さんも来日し、次第にコレクションも多彩になっていきました。

さて、今回の展示会場入口で、異彩を放っていたゴードーワリー・ダック《チャクラ》（図2）や《トゥリシューラ》は、いずれも彼女が神々やアリパン（床画）に代わる新しい主題を描きたいということで、こちらから提案した主題です。チャクラとはヴァイシュヌ神の持つ円盤型の武器で、2メートル四方の画面にそれを描いてもらいました。再び大画面にシヴァ神の持つ三叉の槍トゥリシューラを描くよう勧めたら、彼女も《チャクラ》で手応えを感じたらしく、一度帰国も挟みながら約2年がかりで大作を生みだしてくれました。実は、現地ではインドのフォークアートの有名な作家の名前は聞くことは



図1 ガンガー・デーヴィー《上弦の月を喰べる獅子》1990年ミティラー美術館蔵

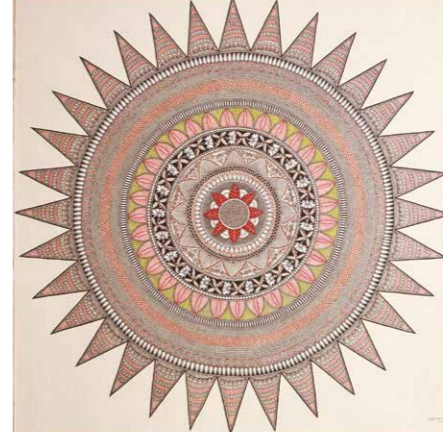


図2 ゴードーワリー・ダック《チャクラ》1990年ミティラー美術館蔵

あっても、インドの公立美術館等にはほとんどそのコレクションがなく、普段その名品を見ることはできません。ミティラー美術館にインドのアーティストが来るということは、彼らにとってほかのインド人アーティストの作品や活動を知る機会にもなり、作家に非常に大きな刺激となり、新しい創造的な作品が生まれるきっかけともなったようです。

ここで、ミティラー美術館の最初のコレクションについてお話します。ミティラー美術館開館時にガンガーさんを招待した際、秋も深まり寒さもますますなか、彼女は毎日筆を進めていました。神様への儀礼のために果物を1日食べるだけの日や断食する日も、ひたすら描き続けました。彼女は朝夜に1時間以上のラーマヤナの経典の読経を行い、5〜6時ぐらいの早朝にお祈り前の沐浴をします。あるとき、私の母親が、彼女が湯船に入らずお湯を汲んで身体を洗っている事に気づき、風邪をひくのではと心配して言いに来ました。インドの人は湯船に浸からないと伝えたところ、自分が入り方を教えるというので、母は自ら服を脱いで風呂に浸かつて見せ、それ以来、ガンガーさんも浴槽に入る日本式の入浴をするようになりました。帰国の際には、ガンガーさんから御礼にと母へライオンを描いた作品をプレゼントしてくれました。彼女の作品はマドバニの手工芸局から他の人には売らないようにと指示があったようですが、特別に寄贈してくれたのでした。今では、私はガンガーさんを「東洋のピカソ」と評価しています。こうした国境を越えた心の交流を伴う滞在中で、ミティラー美術館のコレクションは紡がれていきました。

カルプリー・デーヴィーさんとマハースンドリー・デーヴィーさんが滞在制作を行った札幌市郊外での出来事も印象的でした。夜遅く雨が降るなか、傘をさして街角に出る彼女たちを見つけ、どうしたのかと思い後をつけて行くと、経典を取り出して雨の向こうにいるだろう満月にお祈りを始めました。見えない満月の神様に祈る姿は日本では見ることが出来ません。凄いなと思いました。我々が宇宙に住んでいる事をその姿から感じました。自然・宇宙への入り口となる彼らの作品が、文化遺産として地上に残ってよかったですと思います。そして、これらのコレクションが、インドや世界の次の世代にとって豊かな文化を創造する糧になっていくことを願っています。

\* このタイトルは、開館展の会期中に十日町市を訪れた作家の夢枕蓼氏の目にとまり、小説の題に採用された。その後、この小説は、1989（平成元）年に単行本として早川書房から出版され、同年に第10回日本SF大賞を受賞している。



雪のミティラー美術館と長谷川時夫館長





# 現代のミュージアムコミュニティが描く「これから」

## ICOM プラハ大会 2022 報告

ICOM ウクライナからは、副委員長が文化財被災の状況を伝えるとともに、ICOM ロシアへの強い非難声明が出された。

定義の投票を終え、開票直後の会場の様子。私は ICFA のボードメンバーとして一票を投じた。

同じ目的や価値観を共有する人々の集まりを「コミュニティ」と言います。そしてコミュニティへの帰属意識を有することは、その維持に対する責任をも持つということでもあります。日本で「コミュニティ」と言うと近隣に住まう人たちの集団を指す「地域社会」に限定して捉えることが多く、例えば和歌山県立近代美術館にとっては、和歌山という地域における人間の営みを、特に美術の観点から後世に伝えていくという使命にそれが表れます。しかし当館の活動は、地域だけでなく美術館という活動形態にも支えられているのであって、日本全国で博物館活動を共有するコミュニティに属していても、さらに視点を広げて世界という枠で見たとき、当館はまた、世界中の多様なミュージアムからなるコミュニティを支える、大切な一員ともなっているのです<sup>註1</sup>。

アイコム ICOM (国際博物館会議) は、1946 年に創設された国際的な非政府組織 (NGO) で、ミュージアムに携わるさまざまな専門家が知識とアイデアを共有することで、社会の課題解決に向けて活動することを目指しています。第二次世界大戦が終結した翌年に創設されたのは、戦争によって文化財が危機に晒されたり破壊されたりした経験から、ミュージアムがその専門性をもって、国を超えて手を取り合うという決意によるものです。現在では国別の委員会や 32 の分野に分かれた委員会などがあり、日頃はそれぞれで活動していますが、3 年に一度、一堂に会する機会を持っています。私はこれまで 2016 年のミラノ、2019 年の京都に続いて、2022 年プラハで開かれた 26 回目となる大会 (8 月 20 ~ 28 日) に参加しました<sup>註2</sup>。

大会では毎回大きなテーマが設定され、各委員会はそれに関連した個別のテーマを持ち寄って研究発表や意見交換を行います。今回の大会テーマは「ミュージアムの力：私たちを取り巻く世界を変革する」で、私が所属する美術の委員会 ICFA<sup>アイクファ</sup> では、「オンラインでの美術、その方法とは？」をテーマとし、公開データベースの実践やウェブ上での展示、またオープンアクセスにおける著作権問題や近年新たに登場した NFT などについて議論しました。特に美術の分野は本来的にオリジナルと複製の問題を孕んでいます。コロナ禍も要因となって、その変化は急進し、かつ多様化したと言えます。

全員参加の場としては基調講演やパネルディスカッションなどがあり、今回は 4 つのサブテーマ「目的：博物館と市民社会」「持続可能性：博物館

とレジリエンス」「ビジョン：博物館とリーダーシップ」「発信：博物館と新技術」に沿って議論が進められました。これらのキーワードは、目下、社会が抱える課題に対して、ミュージアムを名乗る組織が取り組むべき接点として示されているものです。他にも危機的状況にある文化財を示すレッドリストの共有、またウクライナにおける被害の状況が報告されるなど、ひとつの国では解決できない事柄の現在が示されました。

なかでも今回特に印象に残ったのは、新たなミュージアムが数多く生まれていることです。そのひとつは、「目的：博物館と市民社会」でのパネルディスカッションの登壇者、ヤスミンコ・ハリロヴィッチ (Jasminko Halilović) 氏がサラエヴォに開館した War Childhood Museum です。日本語に訳すなら、「戦時下の子ども時代博物館」となるでしょうか。ハリロヴィッチ氏は幼少期をボスニア・ヘルツェゴヴィナ戦争の只中で送っています。そして子ども時代に同じような経験をした人たちの記憶を集める活動から、それを証言する資料とともに語り継いでいく必要性を感じて、2017 年にこのミュージアムを設立しました<sup>註3</sup>。

もうひとつの例が 2024 年にニューヨークに開館予定の「アメリカ LGBTQ+ ミュージアム (American LGBTQ+ Museum)」で、同館は市の助成も受けながら、多様な性を持つ人々の文化や歴史を、調査を元にした資料の収集や展示によって明らかにすることを目指しています。加えてこの観点は、人種、ジェンダー、階級、移民、障害を持つ人々など、あらゆる人の公民権ともつながり、ミュージアム活動が平等な社会の実現へ向けて直接に寄与することも期待されます。講演者のベン・ガルシア (Ben Garcia) 氏は、長年アメリカ各地のミュージアムで教育部門や運営部門の仕事をしてきた人物で、2022 年 1 月、同館のエグゼクティブ・ディレクターに就任しました<sup>註4</sup>。

これらのミュージアムは特化したテーマや特定のコミュニティとともにあるため、活動の方針も明確に示されます。といっても一部の人たちのためだけにあるのではなく、コミュニティとして社会に働きかけることが、結果的に多くの人たちの利益につながるという考え方に支えられています。一方で、地域性にその存立根拠を持つ日本の公立博物館のような存在は、誰にとつての博物館／ミュージアムであるのかを、あまり意識されることがないでしょう。しかし「地域の歴史」という大きな枠組みはそれ自体がな



ミュージアムの新定義投票に向けた最終的なインフォグラフィック。最上部には「何千ものミュージアム、何百もの国々、ひとつの結末した定義」と記された。



「LGBTQ+ ミュージアム」と題された 2 人の登壇者によるレクチャーは満席となり、会場に入れない人たちが廊下から聴講するほどだった。



新定義の成立に向けて「賛成を投票しよう」というキャンペーンが繰り広げられた。缶バッジは ICOM コロンビアが製作し、配布したもの。

次回 2025 年の会場はアラブ首長国連邦のドバイ。ICOM 旗リレーの様子。



いでいくべき大切な視点で、また上記のようなミュージアムとは反対に、資料や作品をさまざまな文脈につなげられる可能性を持っていきます。ならばいっそう他と関わる緒を探りながら、つまり複数の「コミュニティ」とのつながりを見出して、より意識的に活動の拠り所となる視点を据えなければならぬのではないかと——現在のミュージアムに関する議論を自らに照らし、このように意識を新たにしました。

さて今回の大会でもっとも注目を集めたのは、京都大会で延期されたミュージアムの新定義の採決でした。ここで「定義」と呼ぶものは ICOM の規約の一節ですが、世界中で共通してミュージアムとは何かを考える軸となります。前回大会ではその内容を議論する時間が不十分であったために結論を先送りすることになりましたが、それ以来、ICOM は新たな検討委員会を設置し、2 年近くをかけて各国・各委員会から出されたキーワードを拾い上げるなど、議論の過程に透明性を確保した民主的なプロセスによって最終案を作り上げました。ICOM にとつても、ここまで広く意見を集めながら規約改正を行うのは初めてのことで、また世界中のあらゆる地域から一人ひとりが真摯に検討し、議論に参加したということもこれまではなかったことです。結果的に賛成 92.41% という極めて高い比率で受け入れられたのは、まさに自分たちで作上げた定義であるという意識の表れだったでしょう。開票の瞬間、その場にいた私たちは皆立ち上がったの拍手喝采で、またオンラインで視聴していたメンバーからも大きな賞賛が届けられたのは、新定義の実現に奔走した委員たちに対してであると同時に、自分たちが描くこれからのミュージアムの姿に対する期待と決意であったと感じられました。この定義の日本語訳も ICOM 日本委員会での検討を経て定められたので、以下にご紹介しましょう。

“博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、楽しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。”

太字は、これまでの定義から新たに加えられた文言です。ここから読み取れることは、ミュージアムには資料を通じて能動的に事象を「解釈

interpret」し、社会に対して意見を伝える役割があるということ。それは「倫理的 ethically」で「専門性ある professionally」仕事によって支えられるということ。またその活動に「コミュニティの参加 with the participation of communities」を求めるとともに、来館者側が「省察 reflection」する必要性も示されています。そうした場を「誰もが利用でき accessible」かつ「包摂的 inclusive」なものとすることで、ミュージアムとミュージアムのある社会が、「多様性 diversity」と「持続可能性 sustainability」を獲得することが可能となる、というのが現代のミュージアムの定義、言い換えるなら「必要条件」として定められたのです。もうひとつ変更されているのは、「研究 research」の語がその役割の第一に記されていることです。何を集めて伝えていくべきか、その判断の根本となるのが「研究」であり、ここにもミュージアムの主体的な仕事の価値が置かれました。あらためて上に挙げたふたつのミュージアムの例を引いてみれば、ともにこれらの新たな要件を満たしていることがわかるでしょう。

2007 年から 15 年ぶりに改正されたミュージアムの定義は、目指すべき姿として私たちに大きな課題を与えとともに、その過程において共に同じ未来を目指す仲間が世界中にいることを明らかにもしました。ICOM 大会とは 3 年に一度、世界でひとつのミュージアムコミュニティとして、互いにこれからの活動を導き合い、そこに属する責任を確認しあう機会になっているのです。

(青木加苗)

註

- 1 本稿では日本の運営形態を指すときは「美術館」あるいは「博物館」とし、世界の基準で記す際は「ミュージアム」とした。
- 2 これら 2 大会については、拙稿「『文化的景観』と美術館——ICOM ミラノ大会に参加して」『和歌山県立近代美術館ニュース』No. 87+88、11–12 頁、および同「ICOM 京都大会 2019 を振り返って」『和歌山県立近代美術館ニュース』No. 100、5–6 頁にて報告した。
- 3 ミュージアム設立に至るきっかけとなったハリロヴィッチ氏の書籍『Djetinjstvo u ratu (War Childhood)』は日本語訳も出版されている：ヤスミンコ・ハリロビッチ編著、角田光代訳、千田善監督『ぼくたちは戦場で育った サラエボ 1992–1995』集英社インターナショナル、2015 年。
- 4 このレクチャーは、アメリカのミュージアム界を常に新たなビジョンで牽引し、2005 年に没した Stephen E. Weil 氏の功績を称えたメモリアルレクチャーとして実施された。